

た ち ば な 新 聞

発行所 宝清寺
〒197-0821
東京都あきる野市小川101
電話 042-558-2663

秋のお彼岸
九月二十日、二十六日 お中日九月二十三日
お会式法要
本年度も、参列者なしで実施致します

「暑さ寒さも彼岸まで」と言われるように、彼岸の頃は季節の分かれ目に当たります。春の彼岸は、生き物をたたえ、自然を慈しむ時、秋の彼岸は、祖先を敬い、亡き人を偲ぶ時、と言われていいます。一年のうち、この季節の仏事を修行するように定めたのは、先祖の深い思いと智慧が込められていると思います。

日蓮聖人は『彼岸抄』に、「それ彼岸とは春秋の時節七日、信男信女ありて、もし彼の衆善を修して小行をつとむれば生死の此の岸より苦海の蒼波をしのぎ菩提の彼岸に至る時節なり、ゆえにこの七日を彼岸となづく。この七日のうち一善の小行を修せば、必ず仏果菩提を得べし。余の時節に日月をはこび功勞をつくすよりは、彼岸の一日の小善はよく大菩提に至るなり。誰人かこの時節を知りて小善を修せざらん」と示されています。

住職ひと口法話 第八十二回

菩提寺に、その家のご先祖代々のお墓があり、そこで供養や法事、月命日のお勤めを行うのが通例です。家族の誰かが亡くなると、その寺の住職が戒名を授け、その後、葬儀を行うのが一般的です。

最近では、菩提寺との関係が疎遠になる傾向が増えていると言われています。祖父母や親世代が菩提寺と交流を持っていたにも拘わらず、それが承継されず家族が亡くなった場合に、最初に菩提寺に連絡する必要があっても、菩提寺の場所や連絡先、住職の名前はおろか、お墓があることすら把握していない方が、葬儀社に直接連絡を取り、その後、親がお墓を購入していた事が分かり、トラブルになることもあるようです。

菩提寺が遠くにある場合でも異なる寺院で戒名を受け、葬儀を済ませる事は避けるべきです。また、家族が亡くなった場合に時々、「戒名をつけても



彼岸とは、日蓮聖人が示されたように、迷いの此の岸から、悟りの彼岸に至ることを「至彼岸」とも言い、お彼岸は悟りを求めて修行に励むことを目的としています。そこで迷いの

此の岸から、悟りの彼岸に至る方法として「妙莊嚴王本事品」に、**六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・智慧・方便）**を施すこと・持戒（戒を守ること）・忍辱（耐えること）・精進（努力を惜しまないこと）・禪定（心を集中して自分を見失わないこと）・智慧（正しく判断する能力を養うこと）の六つの修行方法を表しています。しかし、一週間でこの六つを行うことは難しいと思います。そこで両彼岸の期間、仏壇に、浄水をお供えする（布施に当たる）、お花をお供えする（忍辱に当たる）、線香をお供えする（精進に当たる）、飲食をお供えする（禪定に当たる）、灯燭をともし（智慧に当たる）の五供をお供え、お題目を唱える（持戒に当たる）ことで、六波羅蜜行を全部一度に修行しただけの功德が自然に与えられるのです。彼岸に、ご本尊を拝し、ご先祖のご恩を忍び、感謝し、命の大切さを後世に伝えましょう。

らわないで、俗名のままではいけないのでしょうか」と、言われる方があります。

戒名は故人につけられるものだと思っている人が多いようですが、元々は出家して仏門に入った者が、仏弟子になつた証として生前に与えられていました。その後、出家していない人も亡くなった場合に戒名を授けてもらうようになりました。

戒名は、仏の世界における故人の名前ということになります。従って、仏教では戒名を授けてもらい、戒名で葬儀を行うと、出家していない人も迷わず極楽浄土に導かれると考えられています。

日本で戒名が広まったのは江戸時代と言われ、仏式の葬儀を行う場合、戒名は必要です。

家族が亡くなった場合には、最初に菩提寺に連絡する必要があるため、事前にどの寺が菩提寺なのか確認する必要があります。

お彼岸の期間に家族で、塔婆を建て、お花をお供え、墓参するなどを通して、家の先祖のお墓や菩提寺の場所や連絡先を共有するようにしておくことが大切です。

宝清寺の年中行事

二月節分	厄除け・星祭
三月彼岸中日	彼岸塔婆供養
四月八日	花まつり（灌仏会）
四月八日	オリエンテンプリング
七月十七日	お盆塔婆供養
七月十七日	施餓鬼法要
九月彼岸中日	彼岸塔婆供養
十月十二日	お会式法要
十二月初旬	お盆金締札

宝清寺のお墓の状況

従来のお墓

平成二年九月二十三日、師父石井前恭（日延）上人が遷化、住職を承継した平成三年四月より、山林を造成し、新しく墓所を整備して、橘墓苑を開設しました。当時、お墓が不足し購入が難しいとの風潮から、墓所を購入される方が多く、家族だけでは対応しきれなくなり、管理寺務所を設置致しました。現在も管理寺務所の寺務員が皆様のご供養のお手伝いをさせて頂いております。

永代供養の納骨堂

昨今の風潮として、世代の交代や社会の状況から、従来のお墓の維持が難しいと、永代供養の相談を受けるようになり、平成二十年に納骨堂として「睡蓮堂」を新設しましたが、不足の状況から新たに本堂内に、「蓮華堂」を新設しました。

以来、各寺院や霊園でも納骨堂の募集が多く見られるようになりました。

樹木葬のお墓

お檀家のある方々から、宝清寺では樹木葬のお墓を作らないのかとの問い合わせがあり、令和三年に第一区画の樹木葬のお墓を新設したところ、申込者が多くたちまち完売に近づいたため、将来設置を予定していた、第二・第三区画を建墓し現在に至っています。

前記のとおり、宝清寺には、**従来のお墓・永代供養の納骨堂・樹木葬のお墓**があり、それぞれお墓の形状は異なりますが、いずれの墓所を使用されていても、同じように本堂やたちばな会館を使用しご供養をさせて頂いております。

そうした昨今のお墓の状況下、前回の「たちばな新聞」の記事をご覧になり、墓じまいの相談を受けることが多くなりました。宝清寺では、近年におけるお墓の承継問題にお困りの方への対応策として、檀信徒の皆様、現在建立されご先祖をお祀りしているお墓を「永代供養墓」として残し使用する方法を提案しております。

「永代供養墓」に切り替えた場合、それ以後の管理料の納入の必要はなく期限を設けずに永代に亘り使用でき、今までどおり墓参をしていただき、本堂やたちばな会館でのご供養も可能です。

昨年は「永代供養墓」の申込をされた方が多数ありました。高齢になり墓参が困難な場合や、承継問題でお悩みの方は、ご遠慮なく管理寺務所までご相談下さい。

法華経と私たち 第二十六回

妙音菩薩品 第二十四

そのとき、釈迦牟尼如来は眉間から光を放ち、東方の十八のガンジス川の砂の数に等しい諸仏の世界を照らした。それを超えた向こうに、浄光莊嚴と言ふ名の世界があつた。そこに仏がいて、浄華宿王智如来と号した。釈迦牟尼如来の光はあまねくその世界を照らした。その一切浄光莊嚴国に、妙音という菩薩がいた。善根を植え、百千万億の諸仏を供養して、深い智慧と三昧を得た。釈迦牟尼如来の光明が達したとき、妙音菩薩は浄華宿王智仏に言つた。「世尊よ、わたしは娑婆世界に行つて、釈迦牟尼仏を礼拝し供養し、文殊師利法王子菩薩、藥王菩薩、勇施菩薩、上行菩薩、莊嚴王菩薩、藥上菩薩に会いたいと思います。」そのとき、浄華宿王智仏は妙音菩薩に言つた。「お前はあそこの国へ行つても、その国を軽んじたり仏や菩薩や国土をさげすむような思いを起こしてはならない。」

妙音菩薩は、仏に言つた。「世尊よ、わたしは娑婆世界に行けるのも、すべて如来の神通力であり、如来の智慧のおかげです。」そして妙音菩薩は座を立たず三昧に入り、靈鷲山に蓮華の座を作つた。文殊師利法王子は、この蓮華を見て釈尊に訊ねた。「世尊よ、この菩薩はどのようにしてこの神通力を得たのでしょうか。世尊よどうかこの菩薩の姿が見えるようにしてください。」釈尊は文殊師利に応えた。「多宝如来が、妙音菩薩の姿を娑婆世界に見えるように現してくれらるだろう。」そのとき妙音菩薩はかの国を去つて八万四千の菩薩と共に現れた。妙音菩薩の眼は大きな蓮華の華のようで、面差しは端正で光輝いていた。身体は黄金に輝き、無量の功德を積んだ威風を払っていた。妙音菩薩は、釈迦牟尼仏の前に至り、百千金の値の真珠を奉つた。そのとき華徳菩薩が釈尊に問うた。「世尊よ、この妙音菩薩はどのような功德を積んだか。」

んでこの神通力を得たのでしょうか。」釈尊は華徳菩薩に語つた。「華徳よ、この妙音菩薩はかつて無量の諸仏に仕えて供養した。この菩薩は様々な身体に変身して現れ、あるところでは梵天の姿をしあるいは帝釈天の姿を現し、転輪聖王・長者・居士・宰相・婆羅門・毘沙門天王・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦楼羅・緊那羅・魔護羅迦・人・非人等の姿を現してこの経を説き、地獄、餓鬼、畜生等の娑婆世界の諸々の衆生を救済してきたのである。この菩薩はこのように時と処に応じて変身し、声聞には声聞の姿で、辟支仏には辟支仏の姿で、菩薩には菩薩の姿で、仏には仏の姿で現れ法を説くのである。華徳よ、妙音菩薩はこのような神通力と智慧の力を持つてゐるのである。」華徳菩薩は釈尊に問うた。「この菩薩はどんな三昧にあつて、衆生を救えるのか。」釈尊は答えた。「それは現一切色心三昧という。ここに住して衆生を利するのである。」この妙音菩薩品を説いたとき、妙音菩薩と一緒にきた菩薩や娑婆世界の菩薩たちは三昧と陀羅尼を得たのである。

宝清寺の水谷庵で撮影

『ひみつきちのつくりかた』

この度、プロデューサーの恵水流生氏の依頼があり、「ひみつきちのつくりかた」と題する、左ポスターの劇場用映画が、宝清寺の施設「水谷庵」及び、あきる野市を主な撮影場所として撮影され、住職も出演することになり、完成致しました。



あらすじは、五十歳の佐藤（白畑真逸）がスパゲッティに頭を突っ込み急死を遂げる。佐藤の死を知らされたバツイチ子持ちのサラリーマン・山上（廣末哲夫）は地元へ帰り、佐藤の葬儀に参列すると、小学校からの同級生、御手洗（藤田健彦）、工藤（もりたかお）、豊永（佐藤貢三）と再会することになる。大人になり別々の人生を歩んだ四人の初老たち。昔話に花を咲かせると、工藤がある一冊のノートを取り出す。そこに描かれていたのは『ひみつきちの建設計画』。その夏、彼らはあの頃夢を抱いていた「ひみつきち」をも一度計画し始める。しかし、彼らの目の前には様々な「大人の事情」が立ちはだかるのだった。と言うもので、監督・脚本は板橋知也氏です。

宝清寺管理寺務所からのお願い

一 宝清寺にお墓があり、登録されている名義人が逝去された場合

① 新使用者への承継手続きが必要です。

承継手続きには、承継使用申請書、新使用者の住民票、及び、現使用者に発行している墓地使用許可証を一緒に提出して下さい。

② 管理料をゆうちよ銀行の自動引き落としにされている方は、新たに手続きが必要です。

引落口座名義人が逝去された場合、引き落としを停止させて頂きますので、新使用者の口座から管理料の自動引き落としを希望される場合は、あらためてお手続き下さい。

二 住職及び管理寺務所にご相談のある方

葬儀・法事・お墓の改修工事など、ご相談のある方は、事前にご相談の日時を電話で打ち合わせの上、ご来寺下さい。

三 お問い合わせについてお願い

各種お問い合わせは、午前九時から午後四時までにお願い致します。尚、ご不明な点がございましたら、管理寺務所までお問い合わせ下さい。



私は八月一日の初日に上映の映画館「シモキタ・エキマエ・シネマ『K2』」に行き鑑賞してきました。宝清寺の家族葬用施設水谷庵、境内墓地入り口にある休憩所の東屋、秋川から墓地の間の畑・田んぼ通路、圏央道あきる野インター付近を中心に撮影された映画でした。板橋監督と恵水プロデューサーは「宝清寺の協力が必要でできない映画でした」と話していました。恵水プロデューサーから「あきる野市が中心の映画でもあるのであきる野市長にご挨拶がしたいのですね」とお願いして頂けないかと頼まれ、中嶋博幸市長に連絡をしたところ、「宝清寺のご住職が一緒ならば」と、公務で多忙のところ、時間をとり、会って頂きました。市長は板橋監督・恵水プロデューサーと和やかに談笑されて後、持参したポスターを眺め、一緒に写真を撮りましょうと促されました。板橋監督と恵水プロデューサーは大変喜ばれ、市長にも是非観て頂きたいと話すと、市長は「日の出のイオンモールの映画館でも上映されれば」と話されました。映画館は初日は満席でしたが、翌日から満席で映画に対する関心の高さが伺えます。

映画終了後、恵水プロデューサーがポスターの前で観客の皆様と挨拶をされていました。外では、板橋監督と出演者が迎え、希望者と記念撮影をしており、和やかな雰囲気の中、映画の余韻を楽しんでいました。

この「ひみつきちのつくりかた」が、SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2025にて観客賞を受賞し、レッドカーペットを歩かれたそうです。

シモキタ・エキマエ・シネマ『K2』では、八月二十八日まで上映しています。その後の予定は未定です。